

平成二十二年 中等部入学試験問題 第一回 (国語)

■答えはすべて解答用紙に書くこと

□ 次の(1)～(5)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- (1) 復旧
- (2) 編む
- (3) 境目
- (4) 木立
- (5) 重宝する

□ 次の(1)～(5)の — 線部を漢字に直しなさい。

- (1) 学習計画をネる。
- (2) カイソク電車が通過する。
- (3) パラシユートでコウカする。
- (4) 天変チイ。
- (5) 現場をケンシヨウする。

【三】 次の各問いに答えなさい。

問1 次の(1)～(3)の文の□の中に、体の一部を表す語を漢字一字で入れ、慣用句を正しく完成させなさい。

- (1) 弟のいたずらに□を焼く。
 (2) □もとを見られて、高い物を買わされた。
 (3) 思いやりの心を持つむすめを持ち、親として□が高い。

問2 次の語群から意味の似た漢字を重ねて熟語を一つ作りなさい。

【名・明・路・不・未・難・親・道・友】

問3 次の熟語の中から〈例〉と同じ組み立てになっているものを一つ選び、記号で答えなさい。

〈例〉教育

ア、登校 イ、明暗 ウ、移住 エ、黒板 オ、決心

問4 次の(1)～(5)の文を読み、表現の正しいものは○、そうでないものは×を解答用紙に書きなさい。

- (1) 息子はぜひあなたにおっしゃりたいことがあるそうです。
 (2) 予想外の出来事にも千変万化に対処する力が必要だ。
 (3) 案の定、彼は転んでしまった。
 (4) どなたが夕食を召し上がるのですか。
 (5) たとえ負けても、けつして彼女はくじけないだろう。

【四】 結婚して12年になる悠子さんは、5歳の息子雄飛と、夫と夫の両親と共に暮らしていました。二週間前、夫の父親（義父）が亡くなり、葬儀などであわただしかった悠子さんですが、今日は、同じ地方に住む自分の母親のもとに帰ってきています。次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（ぬき出しと字数が決めている問題は、すべて「」。「」記号などを字数にふくみます。）

おばあちゃんが変だ、とあまいカラメルの香りに満ちた台所へ、息子が青い顔をして呼びに来た。

ガスの火をちいさくしてすぐ居間に行ってみると、さつきまで息子といっしょに録画のアニメを観ていた母親が顔をまっ赤にして額に汗をにじませ、胸が苦しいとうずくまっている。悠子さんはあわてて座布団を敷いてそこにいったん横たわらせ、また台所へ走った。途中、引き戸の角に足の小指をひっかけて勢いよく転び、捨てようと思っていたゴミ箱の中身を蹴散らかしてしまふ。爪先を押さえ、痛みをこらえているその目のまえで、おやつに三人で食べたアンパンのくしゃくしゃにまるめたビニール袋が飛び出し、できそこないの水中花みたいひろがっていくのが見えた。

母が高血圧と不整脈で薬を飲んでいるのは知っていたし、その薬さえ忘れずに飲んでいればなんとかしのげることもわかっていたので取り乱したりはしなかったけれど、こんなときにゴミの花が咲くのを妙に落ち着いて眺めたり、火を消さずにただ弱めるだけにしておこうと考えたりしたことが、なんだか薄情に思えてくる。それでも、食べたいといったのは母なのだ。せつかくつくつたものをあと一步のところまでいなしにたくはない。冷たい水をコップ一杯注ぐと、それを持つて足をひきずりながら、今度は慎重に歩いた。

「母さん、これ、水」

さつき寝かせたままのかっこうでまるまっていた母が、仰向けになって深く息を吸い、また吐き出す。

「おばあちゃん、水」と息子が言う。右手で支えながら上体を起こし、ひと口、ふた口水を飲ませたが、息はまだ荒く、顔色が赤と白と青のあいだくらいでかたまっている。

「薬は飲んだの？ 今日分の薬」

「飲んだよ。さつき、パン食べたあとに」

母がかすれるような声で言う。

「ぼくがおばあちゃんに水あげた」

息子が心配そうに、でも自慢げに言い足した。

「頓服どんぷくみたいなのはもらってる？」

「食後に飲む薬だけだよ。じつとしてれば、たいがいおさまる」

「だいたいけど。やつぱり疲れたのよ。気を遣つかわせちゃったから。ごめんね。ここで横になってたほうがいいかも」

そういつて寢室しんしつの押入おし入れから毛布を取り出すと、悠子さんはそれを居間に運び、座布団四枚分の大きさしかない母親のうえにそつとかけた。身体からだに厚みがない。お腹なかと背中が、童謡どうようの歌詞にあるみたいにくつついている。

「雄飛、ビデオはまたあと。おばあちゃん休ませてあげなきゃ」

「うん」状況じやうきやうを理解しているのかいないのか、よくわからない声で息子が答える。

「電気消すよ。はやく」

悠子さんが畳たたみにぺたりと座すわって母親とテレビの双方そうほうを覗のぞいている息子の手を取ろうとすると、いいよ、ここで覗のぞてな、と下から弱々しい声がした。

「おばあちゃんは横になつてただけだから。好きなだけ観かんなさい。だれかここにいてくれたほうが、かえつて安心だよ」

「そう？　じゃ、なにかあつたら、雄飛に言つてね」

悠子さんはまた痛む足をひきずりながら台所に戻り、蒸し焼きにしているプリンプリンを器うつわごと軽く揺ゆすつて加減をたしかめた。真ん中あたりに、ちよつとした波が立つ。あと、すこしかな。火の大きさは変えずに、数分のあいだその場で見張つていた。換気扇かんきせんをまわしているのに吸いきれない湯気がひろがつて、台所ぜんたいがなまあたたかい。喉のどにはちようどいい湿度だ。さつきは気づかなかつたけれど、グラニュー糖の袋が横だおしになつていて中身がかなりこぼれていて。ほんとうは、はやめにカラメルだけつくつて冷蔵庫で冷やしておきたかつたのだが、時間がなかつた。

悠子さんにプリンの作り方を教えてくれたのは母親で、その母親のプリンが大好物だった父親が先年亡くなった。結婚まえ、実家から仕事に出ていた悠子さんは、週末に片づけを手伝うだけで、料理はもちろん家事の大半を母に頼り切っていた。家を出ることになつて料理をひとそろい母親に習い、プリンのレシピも教えてもらったのである。

父が死んでしばらくしてから、悠子さんは義父に母譲りのプリンを出したことがある。すると義父は、悠子さんの、権現山のお母さんのところへ届け物をしたとき、たまたまそのプリンを出してもらつて、世の中にこんなうまいものがあるのかつてほんとに感心したもんだ、と話してくれた。職場がたまたま近かつたので、陽気でおしゃべり好きな義父はひとり暮らしの母のところへちよくちよく顔を出すようになったのだが、ある日、母からそのプリンを御馳走ごちそうになつたのである。

「そのときはこんなおしゃれな器うつわじゃなくて、まるいお椀わんだったなあ。うちはみんな和食に和菓子で、こういうものは食べ慣れてないから、具のない茶碗蒸ちやわんじゆみたいなのをわざわざ冷やして食わせるのなんてびっくりしたよ。でも、食べてみて驚おどろいた。うまい。絶品だねえ、あれは。お椀をさかさまにしてポンポンと軽く底をたたくと、中身がぷりんと出てくる。プリンてのはそういう意味じゃないかね。器のまま匙さじですくつて食うもんだとばかり思つておつたんだが、ひっくり返したら、頭のほうにこれとおなじ、あまいとろつとした汁じゆがかかつていて……」

「お義父さん、それはだし汁じゃなくて、カラメルです」と悠子さんは訂正した。「お砂糖を煮詰めたもの。カラメル。キャラメルとおなじカラメル」

「うん、そのカラメルっていうだし汁がじつにうまかつた。悠子さんののは、うまいうえに、ちよつと苦みがある」

「それは……ただ砂糖を焦こがしただけです」

「なるほど。期せずしてよい味が出てるつてことか」

雄飛が離乳食を受けつけ、やがていつぱしの食事ができるようになつたころから、山之内家ではこの伝家のプリンが増えて、悠子さんの腕うでもいつきに上達した。義父の説明のとおりに、夫は甘味かんみといえは和菓子を求める。甘党あまどうというほどではないので、プリンを焼いてもあまり反応を返してくれないのが残念といえは残念なのだけれど、おかげで息子は大好きになつてくれた。

以前、母のプリンを食べていたときには父のことばかり思い出していたのに、この家の台所に立っていると、はじめて会ったころからずっと自分を信用してくれて、カaramelを焦がせばちよつと焦げたほうが好みだと言ひ、砂糖を入れすぎればあまりほどうまいと言ひ、味が薄ければそのほうが身体にいいと言ひ、いつもおいしいを連発してくれた義父の顔のほうが鮮明に浮かぶようになっていた。悠子さんは感慨をおぼえた。父もよくしゃべるひとだったが、義父はその倍ちかくしゃべり、笑い、冗談を言う明るい性格で、さみしそうにしていた母にとっても、いつのまにかだいな話し相手になっていた。

その義父が二週間まえに逝つてからの騒ぎの連続は、山之内の家族みなは精神状態を不安定にした。とくに母親は持病があるにもかかわらず、やはり丈夫とはいえない義母とふたり、夫の親族を向こうにまわしてあれこれ立ち働き、思いがけない出来事の連続に疲弊しきつていた。

けちのつきはじめは、町の仕出し屋に頼んだ弁当を食べた親族のうち、佐野倉の大叔父と呼ばれているちよつと堅物で融通のきかないひととその妻、そして婿夫婦の四人が、帰途、体調をくずし、そこから最寄りの救急病院へ運ばれるという事件だった。龍田屋さんというその仕出し屋は夫の紹介で、悠子さんの家でも節目節目の集まりにお願いするようになっていたのだが、佐野倉の大叔父の友人にたまたまこの地域にチェーン展開している弁当屋がいて、どうしてもそこに頼みたい、じつはもう口をきいてやると請け合つてしまった、沽券にかかわることだし、安くしてくれるはずだからこちらに変えてくれというたつての願いを、夫がきつぱりと断つたのである。プラスチックの容器ではなくちゃんとしたお重で出してもらわなければさまにならないし、龍田屋の味を父が好んでいましたから、というのがその理由で、悠子さんも、母親も、義母も、それには賛同していた。

ところが、当日その弁当を食べた親族のうち、べつこの弁当屋を薦めた大叔父たちだけが食中毒の症状を訴えたのだ。幸い大事には至らなかったものの、彼らはそれみたことかと夫の「傲慢さ」や悠子さんの「追従ぶり」をとりあげて貶めるような話をあちこちで披露した。身内だけでなく、先のチェーン店をつうじて龍田屋の悪評をひろめさせるような手管をつかい、まさかそこまでとは予想だにできなかった夫をも苦しめることになった。

龍田屋さんが真つ青な顔で家にやってきたのはその数日後のこと、悠子さんが差し出したお茶には手も触れず、主人の龍田さんは頭を下げたままで喋つていた。なんとお詫び申しあげたらよいのか、大切な集まりでこのような不始末を起こしましてと畳に頭をこすりつけるようにあやまるのを、悠子さんは夫の背中越しにお盆を抱えながら眺めていた。詫びにやってきたひとにお茶を出してどうぞごめつくりなんて言うこともできないし、といって、なんにも出さずに放っておくのも非常識だと、葬儀の夜のために買っておいした新茶を、こんなときこそという気持ちで丁寧に淹れて出したのだった。

起きてしまったことに夫はあれこれ文句を言うつもりなどなかったようで、四人とも一晩入院して点滴を受けたらすっかりよくなり、いまはもうなんの心配もいらなと伝えた。車での移動中にお腹が痛くなつて怖かつたんでしよう、実際よりやや大げさな反応だったかもしれないし、となぐさめるように言った。保健所の検査ではホタテのフライがあやしいだろうというあいまいな結果しか得られず、腹痛の原因は不明のままなのである。しかし保健所が動けば、こんなちいさな町ではもうそれだけで悪しき既成事実となつてしまうのだ。黄色ブドウ球菌だの、腸炎ビブリオだの、ノロウイルスだの、どこかで聞きかじつてきたことをならべて鬼の首を取つたようにまくしたてた佐野倉の大叔父大叔母たちにとって、龍田屋に下された三日間の営業停止処分は無罪に等しいものだったにちがいない。

(堀江敏幸『未見坂』所収「プリン」より)

注1 頓服……熱さましの薬。

注2 レシピ……料理や飲み物などの作り方を書き記したもの。

注3 沽券……人前で保ちたい体面や品位。

注4 手管……口先でうまいことを言い、人をあやつること。

問1 — 線①「座布団ざぶとんを敷いてそこにいったん横たわらせ、また台所へ走った」について、「悠子ゆうこさん」がこのような動作をした理由を説明しなさい。

問2 — 線②「火を消さずにただ弱めるだけにしておこうと考えた」のはなぜですか。その理由がわかる一文を本文中よりぬき出し、その最初の5字を答えなさい。

問3 — 線③「やっぱり疲れたのよ」について、家族の中でもとりわけ母が「疲れ」てしまった事情がわかる一文を本文中よりぬき出し、その最初の5字を答えなさい。

問4 — 線④「畳たたみにぺたりと座すわって母親とテレビの双方そうほうを覗みている息子むすこ」は、悠子さんの目にはどのように映っているか。その説明として最も適切な部分を本文中から25字以内でぬき出して答えなさい。

問5 — 線⑤「義父の説明」について、ここでいう「説明」にあたるのは本文中のどの部分ですか。その部分をふくむ一文の最初の5字をぬき出して答えなさい。

問6 — 線⑥「悠子さんは感慨かんがいをおぼえた」について、その理由の説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、いつの間にか実の父のことを忘れてしまい、義父のことばかり気にしている自分の薄情はくじょうさに驚おどろいたから。
 イ、すっかり夫の家族の一員としてなじんでいる自分にとっての義父の存在の大きさが、改めて身にしみたから。
 ウ、夫が自分の料理に興味を示してくれない代わりに、義父が気をつかってほめてくれたことに感謝したから。
 エ、義父が自分のことを気に入ってくれているのがうれしくて、亡なくなった父もさぞ喜んでいるだろうと思ったから。

問7 — 線⑦「いつのまにかだいたい話し相手になっていた」について、このような関係になるきっかけとなった義父の行動がわかる一文を本文中よりぬき出し、その最初の5字を答えなさい。

問8 — 線⑧「それ」の指示内容の説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、大叔父おおおじの申し出より家族の気持ちを優先した夫の判断。
 イ、息子として亡父の遺言ゆいごんを尊重したいという夫の姿勢。
 ウ、安っぽい食器の材質が好みに合わないという考え。
 エ、値段が安くなるかどうかは関係ないという品格。

問9 — 線⑨「夫をも苦しめることになった」について、夫が苦しんだ理由を説明しなさい。

問10 — 線⑩「こんなときこそという気持ち」とは、どのような「気持ち」ですか。その説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、もめごとを引き起こしたことに立腹し、あてつけに優しい態度をとってやろうという気持ち。
 イ、相手の態度をあわれに感じ、言葉に出せない共感を感じてもらおうとする気持ち。
 ウ、どうすることも出来ない自分の心の動揺どうようを、なんとかごまかそうとする気持ち。
 エ、ゆつくり引きとめることは出来ないが、相手のお詫わびの姿勢を認める気持ち。

問11 — 線⑪「起きてしまったこと」の内容を、40字以内で説明しなさい。

問12 — 線⑫「無罪に等しいものだった」と感じられるのはなぜだと思われますか。それまでのいきさつもふまえ、説明しなさい。

〔五〕次の文章は、筆者がポルトガルの21歳のバーテンダーに「今日よりよい明日はない」という言葉を教わって衝撃を受けた後の話です。これを読み、あとの問いに答えなさい。（ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「1」。「1」記号などを字数にふくみます。）

ポルトガルは、十五世紀から十六世紀にかけて、世界の海を制覇した国です。

アフリカではガーナに城塞を築いて早くから金や奴隷の交易をおこない、一四九八年、バスコ・ダ・ガマによる喜望峰を経由してインド東岸に達する大航海によってアジア進出を果たします。一五〇〇年にはブラジルを植民地化。十六世紀のポルトガルは、スペインと二国でヨーロッパ以外の世界を分割して覇権を唱えるほど、比類なき権勢を誇った国でした。

その後、ポルトガルとスペインは、イギリスやオランダなど新興海洋国の勃興によってしだいに力を失い、さらにポルトガルはスペインに併合されるなど凋落の一途をたどります。世界を制覇して栄華を極めたあとは、緩やかな下り坂の歴史でした。

ポルトガル人の家を訪ねると、広い部屋に立派な家具や調度が飾られています。これはいつの時代のものでしょうか、と聞くと、十六世紀です、という答が返ってきます。これは？ 十六世紀。あれは？ 十六世紀。それも？ もちろん十六世紀。すべての栄華は十六世紀にあり、その後の五百年にはそれを越える発展は生まれてはいない。今日よりよい明日はない、という言葉は、そのあたりから生まれてきたのでしょうか。

私は、ポルトガルが大好きです。焼き魚とコメを食べるポルトガル料理に親しみを抱く日本人は多いと思います。キャベツの葉を刻みこんだカルド・ヴェルデ（緑のスープ）は、スプーンで掬うと中のマッシュポテトが浮き上がるさまが味噌汁そっくりです。

なによりも魅力的なのは、ポルトガルの人たちです。どの人も、ラテン系の民族とは思えないほどシャイで、昔の日本人のように慎ましい。こんなに優しく大人しい彼らの祖先が世界中で恐れられた植民地主義者だったとは、想像することすらできません。

ポルトガル語に、サウダージ、という言葉があります。民俗歌謡ファドにおける重要なテーマとされるもので、ふつう「郷愁」と訳されますが、単なるノスタルジーではなく、失われたものへの切ない思い、取り戻せない過去への慕情、追いかけても得られない憧れのようなもの……といった複雑なニュアンスが籠められた言葉です。

哀愁に満ちたファドの歌声は、深い悔恨を誘って胸を抉ります。その声を聞きながらこの国の大人たちは、ひたすら昔を懐かしみながら暮らしてきたのです。それにしても、なんとこの落ち着きと、穏やかさ。そして、慎み深い心の優しさ……。ポルトガルを訪ねる人は例外なく、彼らが醸し出す癒しに満ちた静けさに魅了されます。

今日よりよい明日を求めるから、人は思い煩うのです。

よりよい明日を、より豊かな暮らしを、という、際限のない欲望が人を苦しめます。

③その桎梏（人の行動を厳しく制限して自由を束縛するもの…出題者注）から解放された人びとは、どんなにしあわせなことでしょうか。

今日よりよい明日はない。この言葉が実際にポルトガルでどのくらい一般に知られた言葉なのか、毎日満足して暮らせばよしとするあのバーテンダー君のような考えが、はたしてこの国の若者に共通のものなのか、
1 EUに加盟してからのポルトガルには新しい経済発展の道筋があるでしょうし、一概にはいえないと思いますが、十六世紀以降、何代にもわたって育まれてきた精神を受け継いだ彼らが、ある種の達観ないしは諦観を自然なかたちで受け入れていることはたしかなようです。

④翻って私たちの生活を考えたとき、私たちは「すでに成熟した社会」にふさわしい生きかたをしているといえるでしょうか。

日本が戦後経済をテイクオフして高度成長を成し遂げたあの「若く未熟な時代」と較べれば、そろそろ「成熟し老境に入りつつある」現在、私たちははるかに豊かな社会生活を享受しています。

街頭テレビに群がって、力道山とシャープ兄弟のプロレスに熱狂した時代。ピアノのように見えないときはレースをかけて、大事にしていたわが家のテレビ。白黒テレビの前にスクリーンをはめると三色に見えるとはしゃいだこともありました。

そのうちに、本物のカラーテレビが登場します。いつのまにか、チャンネルは手まわしではなくリモコンで操作するようになっていました。

家には電話がなく、用事があるときは近所の電話がある家の番号にかけて呼び出してもらう。私の家では、向かいの魚屋さんの電話を「呼び出し」番号にしていました。うちに電話がかかってくると、魚屋のおやじさんはわざわざ刺身を切る包丁を置いて手を拭き、バス通りを横切つてさらに路地の奥にある私の家まで「電話ですよー」と呼びにきてくれるのですから、なんと悠長な時代だったことでしょう。それがいまでは携帯電話。携帯電話だって、最初のは靴ぐらゐの大きさと肩にかけていたのが、レンジ程度の大きさに「小型化」したといつて驚いていたら……。

レコードの針がなくなり、カメラのフィルムがなくなる時代が生きているうちに来るとは、私たちが子供の頃は誰もが想像すらしていませんでした。

②、経済的にこれほど豊かになり、社会は成熟したのに、私たちはいつこうに際限のない欲望の対象から解放されません。

カラーテレビで満足していたら、ブラウン管より薄い液晶がいいという。十四インチに慣れていた目には二十インチでも巨大なのに、四十インチだの五十インチだの、狭い家では近過ぎて見にくいから、家の中のテレビを窓の外のベランダから眺める始末。③こんどは地デジに買い替えるだとか？

もう、いい加減にしてくれないか。携帯電話もデジカメも、最新機種を買つても一週間で古くなる。もつと新しい機種をもつと機能が充実したものを。もつと、もつと……。

④そうして人が古いものを捨て、新しいものを買うことが、経済の発展……なのでしょう。近代資本主義の世界では、そうしておカネさえ動けば「景気がいい」というのですからたしかにそうなのかもしれませんが、そんなことばかりやってきたから、昨今の得体の知れない世界同時不況という、怪物の跋扈を許しているのではないのですか。

モノやカネがそれほど動かなくても、それなりに豊かな生活の質を保つ方法はあるはず。どこかで欲望の輪郭に線を引き、いまの暮らしを肯定して、これが自分のスタイルなのだ、と毅然としていうことはできないのでしょうか。

今日はご馳走だ、といつてふだんは買わないような高い肉や魚を買い込み、腕をふるつておいしい料理をつくつて家庭で食卓を囲んだら……食事しながら見ていたテレビの番組で、もつと豪華な、もつと高価な、もつとおいしそうな料理を、くだらないタレントたちが騒ぎながら食べ散らかしている。

奮発して買った国産牛肉があんなに高いと思つたのに、テレビの中で食べているのはその十倍以上もする幻の超高級銘柄牛。

いつもの赤身のかわりに思い切つてパック入りのトロを買つたのに、テレビの中で食べているのは一頭二千万円もする大間の一本釣りホンマグロ。

なんだ、もつとおいしいものがあるんだ……。

いつべん、食べてみたいなあ。

そう思つた途端に、目の前の料理が色褪せていきます。

そんな馬鹿なことがあつていいでしょうか。

本当は、食材がどうであれ、いまみんなで囲む食卓の上にある心を籠めた手づくりの料理のほうが、テレビの中の高級料理より、百万倍もおいしいのです。間違ひありません。私が断言します。絶対、間違ひありませんから。

日本ほど、いつテレビをつけても料理の番組をやっている国はないでしょう。外国にも料理番組がありますが、日本ではいわゆる料理番組以外でもいたるところにおいしそうな料理が映るシーンがあり、これでもかと欲望をかきたてます。

もちろん、そうやって煽るテレビ番組も罪作りであることはたしかですが、引きずられる私たちのほうにも問題がないとはいえませんが。いま目の前にあるものを肯定して、この牛肉はおいしいね、今日はトロだなんて凄く馳走だね、と目を輝かせ、楽しく笑つて食べればいいじゃないですか。⑤テレビなんか消して。

今日よりよい明日はない。この言葉を借りて私がいいたいのは、決して未来を悲観せよということではありません。そうではなくて、いま目の前にある現実を楽しもう、ということなのです。⑥いまそこには、わけのわからないものを追いかけずに。

サウダージ……。

追い求めても得られない憧れのようなものを、未来に、ではなく、取り戻せない過去に求めるとは、なんとお洒落なセンスでしょうか。

(玉村豊男『今日よりよい明日はない』より)

- 注1 覇権……武力によってにぎる国際間の権力。
 注2 勃興……急激に勢力を増して栄えること。
 注3 凋落……おちぶれること。
 注4 ニュアンス……言葉の微妙な意味合い。
 注5 悔恨……自分のしたことをくやみ残念に思うこと。
 注6 達観……細かい事にこだわらず、物事の本質を見通すこと。
 注7 諦観……悟りあきらめること。
 注8 テイクオフ……発展途上国が発展の停滞状態から自立成長の可能な状態になること。
 注9 享受……受け入れて、味わい楽しむこと。
 注10 跋扈……わがもの顔に振る舞うこと。のさばりはびこること。

問1 本文中の 1 2 3 に入れるのに最も適切な語を次の中よりそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。(ただし同じ記号を二度以上使わないこと)

ア、そのうえ イ、したがって ウ、しかし エ、もちろん オ、または

問2 ——線①「十六世紀のポルトガル」とありますが、ポルトガル人にとって「十六世紀」はどのような時代ですか。「」がある時代」に続くように、第3段落から第7段落までの本文中より6字でぬき出して答えなさい。

問3 ——線②「今日よりよい明日はない、という言葉」とありますが、この言葉はポルトガル人のどのような気質を表していますか。文章全体を読み、「未来」「現実」という二語を必ず用いて説明しなさい。

問4 ——線③「その桎梏(しごく)(人の行動を厳しく制限して自由を束縛するもの…出題者注)」とはどのようなものですか。最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、たくさん物の物に囲まれて不自由なく過ごすだけでなく、内面も磨いて豊かにしなくてはならないと思う気持ち。
 イ、十分に使える物を持つていてもそれで満足せず、もっと高機能で高級な物を手に入れなければならないと思う気持ち。
 ウ、これから手に入れる物のことよりも過去のことを考えるポルトガル人の精神に、追いつかなくてはならないと思う気持ち。

エ、満足できる生活を送るためには高機能で高級なものを手に入れなければならない、そのために働いて稼がなくてはならないと思う気持ち。

問5 ——線④「翻(ひるがえ)って私たちの生活を考えたとき、私たちは『すでに成熟した社会』にふさわしい生きかたをしているといえるでしょうか」について

(1) 筆者はこのことを説明するために「携帯電話」を例に挙げていますが、今の日本人がどのような生活をしていることについて説明するために挙げられている例ですか。30字以内で説明しなさい。

(2) 筆者は(1)で述べたような今の日本人の生きかたに否定的ですが、どのような点で否定しているのですか。35字以内で説明しなさい。

問6 ——線⑤「豊かな」とありますが、ここでの「豊か」とはどのような状態を指していますか。最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、生活に必要な物がすべてそろっている状態。

イ、あつてほしいと求める物をいつでも作ることができる状態。

ウ、単に物があるというだけでなく、それを使いこなす技量もある状態。

エ、単に物があるというだけでなく、より便利なものに満たされている状態。

問7 ——線⑥「古いものを捨て、新しいものを買うこと」とありますが、これについての筆者の考えとして最も適切なものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、古い考えにこだわらないことで新しい発想が生まれるので、賛成である。

イ、新しいものを買おうとする消費者の意欲がよりよい製品を生み出すので、賛成である。

ウ、買うことでおカネが動いても質の高い生活になるわけではないので、反対である。

エ、古いものを捨てることで廃棄物が増えて環境に悪影響があるので、反対である。

問8 ——線⑦「テレビなんか消して」と筆者が述べるのは、テレビの料理番組が視聴者にどのような影響を与えるものであるからですか。50字以内で説明しなさい。

問9 ——線⑧「いまそこにはない、わけのわからないものを追いかけて」とありますが、「いまそこにはない、わけのわからないものを追いかけて」た場合について

(1) その結果人々はどういうような良いことがあると信じていますか。「」の発展」につながるように、本文中より2字でぬき出して答えなさい。

(2) その結果何ができなくなりますか。「」すること。」につながるように、本文中より10字以内でぬき出して答えなさい。

④印の部分は何も書かないこと

(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	

問 4	問 2	問 1
(1)	問 3	(1)
(2)		(2)
(3)		(3)
(4)		
(5)		

五

受験番号			
氏 名			

五 の解答らんは裏面にあります。

